

【別紙様式2】

令和6年度北区立滝野川小学校 学校関係者評価報告書

令和7年2月26日

学校関係者評価委員会 委員長 湊 恵理子

1 学校関係者評価委員会の構成

- ・湊 恵理子 前スクールコーディネーター、前わくわく滝野川ひろば実行委員長
- ・渋谷 昭仁 青少年西ヶ原東地区委員会 会長
- ・橋本 雅美 西ヶ原地区 主任児童委員、わくわく滝野川ひろば実行委員長
- ・所澤 潤 立正大学心理学部 教授
- ・石川 千世 石川幼稚園 園長
- ・柳沼 智宏 田端児童館 館長
- ・橋本 修一 前 PTA 会長
- ・山口 智治 PTA 会長

2 学校関係者評価委員会の主な活動

- 令和6年6月22日 第1回学校評議員会
 - ・学校経営方針について（校長）
 - ・北区基礎基本の定着度調査の結果について（校長）
 - ・年間行事について（教務主幹）
 - ・意見交換
- 令和6年11月30日 第2回学校評議員会
 - ・展覧会鑑賞
 - ・1学期及び2学期前期の教育活動について（教務、生活、学校経営より）
 - ・意見交換
- 令和7年1月18日 第3回学校評議員会
 - ・学校経営報告
 - ・学校評価アンケート（児童、保護者、教員）の結果について
 - ・意見交換
- 令和6年4月～令和7年3月
 - ・学校公開参観
 - ・道徳授業地区公開講座参観（12月14日）
 - ・各学校行事参観（入学式、運動会、展覧会等）

3 学校関係者評価の結果と分析（8名回答）

（評価の段階 Aあてはまる B少しあてはまる Cあまりあてはまらない Dあてはまらない Eわからない）

No.	評価項目（人）	A	B	C	D	E
1	学校生活	8	0	0	0	0
2	児童の学力	5	2	0	0	1
3	学習指導	4	1	0	0	2
4	習熟度	5	1	0	0	2
5	研究内容	4	1	0	0	3
6	ICT の活用	3	3	0	0	2
7	NIE	8	0	0	0	0

【別紙様式2】

8	生活習慣	3	4	0	0	1
9	集団規律	5	3	0	0	0
10	特別活動	7	0	0	0	1
11	健康教育	7	0	0	0	1
12	心の教育	7	0	0	0	1
13	読書指導	5	2	0	0	1
14	安全指導	8	0	0	0	0
15	環境	6	2	0	0	0
16	教育相談	6	1	0	0	1
17	いじめへの対応	6	1	0	0	1
18	特別支援教育	6	0	0	0	2
19	保護者との連携	3	4	0	0	1
20	開かれた学校	8	0	0	0	0

- ・各設問において概ね肯定的な回答を得たが、「わからない」という回答も多かったことから、評議員会に限らず、様々な機会に評価を得られる場面を設定する必要がある。
- ・NIE の取組については、長年積み重ねてきた研究内容が、確実に児童の学力につながっているという評価を得られた。
- ・関係機関との連携については「あてはまる」の数値が多かったのに対し、保護者との連携についてはやや落ちていることから、授業公開をはじめ、さらに積極的な情報発信を行う姿勢を示したい。

4 改善の方策についての意見

- ・学校行事や授業公開に参加できるようになり、子供たちの様子が見られてよかった。
- ・転入した教員に、早い段階で滝野川小の教育活動を知らせることが必要である。
- ・学校公開における授業で業者を活用する際には、担任が担うべき役割も明確にしておく必要がある。
- ・授業において聞くだけの時間を減らしたい。児童に考えさせる声掛けが必要である。
- ・学校公開において子供の発言を教員が受け入れる雰囲気がとてもよかった。本当に間違えている子と、わざとふざけている発言との違いも子供は判断できていた。
- ・新聞を読む学習をしていると、漢字が読めるようになる。子供にその実感が伝わるのではないか。漢字を書く練習は必要である。子供にも保護者にも意図的な学習の価値をしっかりと伝えるべきである。
- ・PTAに入らなければ得られないメリットが少なからずあることも、適切な時期に保護者に説明したい。
- ・教育活動の様子が分からないので、評価しにくい項目がある。
- ・教職員自己評価で肯定的な割合が低い項目が気になった。校内外での研修を重ねる必要がある。
- ・挨拶についてはいつでもどこでも明るく元気な挨拶を互いに交わせるよう、子供からの発信を待つのではなく教職員から率先して行わないと変わらないのではないか。
- ・児童に貸与されるタブレット端末が更新されることを期待している。子供たちが連日持ち帰る機会が増えているため、学習の有用性と子供たちの負担のバランスを考慮し、効果的に活用してほしい。
- ・社会学や読解力の分野では、NIE の取組が特徴的で非常に良さを感じる。一方で、算数や思考力を伸ばすための新たな取組が加わることで、授業がさらに魅力的になるのではないか。